

Music

ビーチ・ボーイズとカリフォルニアの海の香り

Text & Photos: George Cockle
文・写真/ジョージ・カックル



鎌倉で生まれたからって、小さい頃からサーフィンをやっているわけじゃない。サーフィンをはじめたのは中学一年の頃。俺は夏休みにテキサスから韓国へ引越す途中、LAに何カ月かいたことがあったんだ。アメリカの夏休みは3カ月と長いからね。本当はすぐに韓国に行くはずだったが、引越し先の家がまだ完成していなかったから、LAの父の友達の家でずっと泊まっていた。

ひと夏の間、何もしないで過ごす俺と兄貴が悪い遊びをするんじゃないかと心配した親は、俺たちをサーフキャンプに入れた。今でも名前は覚えているよ、パッド・クレーヴェンズ・サーフキャンプ。サーフキャンプと言っても、ただ毎朝サーファーの先生が朝5時ぐらいにロングボードを何枚も積んだ大きなワンボックスで迎えに来て、海に連れて行ってくれるというものだ。俺たちはお弁当と海パンだけを持って行けば良かった。別にサーフィンを手取り足取り教えてくれるわけじゃない。見本を見せてくれて、あとは勝手にやれという感じだ。そして夕方まで、勝手にボードと悪戦苦闘しながら海で過ごした。

でも毎日、カリフォルニアのいろんなサーフ

ポイントに連れてってもらった。ハンティントンみたいな都会のポイントにはあまり行かなかったけど、あの有名なマリブやリンコンまで連れて行ってくれた。カリフォルニアの海はなんでこんなに冷たいのかと思った。もちろん誰もウェットなんか着てない。カリフォルニアの朝は空気まで寒いのにね。サーフウェアも親にずいぶん買ってもらった。当時はHANG TENのTシャツが一番はやってたかな？ プリントじゃなくて、ちゃんとHANG TENの模様編み込んであったんだ。そしてもうすっかり一人前のサーファーになった気分韓国に引越したら、俺が住んだインチョンは海はあるのに、波はない。ずっと沼地なんだよ。もうがっかりだった。住んだ場所は米軍の倉庫しかないキャンプ。そこにはうちの家族とキャンプを守るMPが6人ぐらい住んでいるだけだった。遊びといえば、ビリヤードだけ。海に近いのはそんなプールだけだ(笑)。一気に気分がトーンダウンした俺だが、ある日、そのビリヤードがあった建物に昔の蓄音機を見つけた。そしてなんとその蓄音機とともに何枚かのLPレコードがあった。モンキーズ、ローリング・ストーンズとビーチ・ボーイズ……。前に住んでいた人た

ちが置いていったんだろう。

海に行けなくなったサーファーとしては、もちろんビーチ・ボーイズを聴く。そのレコードが1966年に発売された「ペット・サウンズ」でも聴いてみたら、サーフィンの曲が一曲もない。でも彼らの音は変わらず、レッキとしたサーフミュージックなんだ。いくらサーフィンのことを歌っていなくても、彼らのハーモニーを聴くと、カリフォルニアの海の香りがする。冷たい水、暑い太陽、ヤシの木、様々なカリフォルニアのイメージが浮かんでくる。

インチョンからソウルに引越す間の数ヶ月は、そのビリヤードの部屋でこのレコードを毎日のように聴いていた。海には行けないけど、ビーチ・ボーイズの音を聞いて、海にいる自分を想像した。このアルバムには、その頃の思い出が詰まっている。これ一枚あれば、どこに行っても海を感じられる、そんな名盤だ。それは俺が保証するよ(笑)。



ジョージ・カックル 60-70年代のロックに精通し、ラジオ・パーソナリティとしてインターFMや東京FMで活躍中。鎌倉出身・在住。波乗り歴38年の親父サーファー。
www.whatsupmusicinc.com